

<全般>

- 県が2050年に実質ゼロを目指すにあたり、どういう社会・ビジョンなのかというのを描きつつ、それに向けて取り組んでいかないと難しいのではないかな。
- 「滋賀県らしさとは何か」を、今一度、整理をしておくべきではないかな。特徴がないと、他自治体の条例と変わらなくなる。緩和策に関しても、琵琶湖を中心とした生態系豊かな自然を有する滋賀県ならではの緩和策を打ち出していきたい。
- コロナによる影響は、マイナス面だけではなく、働き方や様々なことで、CO₂削減の生活行動に生かせる部分もある。今回のコロナに関連するいろいろな変化を、他の部署とも連動して、今後活かしていけるようなネットワークや情報のつながりを構築していくのがよいのではないかな。
- ネットゼロ社会の取組の裏側には、農業者の活動、森林の活動があり、滋賀県が目指す大きな社会像の一部というのがネットゼロであるとわかるように提示されるといろんな方が自分にも関連があると思うのではないかな。
- CO₂ネットゼロの取組は、都市計画、生産緑地(農林漁業と調和が図られた地域)、農林業などより広い視点でも取組を考えていく必要があるのではないかな。
- 脱炭素社会だけで考えてはいけないことであって、持続可能社会の中のひとつとして脱炭素社会がある。機会の均等性、居住の快適性、安心、安全であるとかを含めたかたちで脱炭素社会があり、多様な方が暮らしているなかでどれだけ幸福を感じるか。持続可能社会の究極目標であるwell-beingの達成の上でネットゼロがある。そういったことを含めて、脱炭素社会の実現に向けた検討を進める必要がある。

これまでにいただいたご意見等②

<事業活動>

- エネルギーの供給がなければ、事業はできない。どのようにエネルギーを調達するのかを、県の立場、色々な角度から考えると、この条例の中で持続可能な部分が見えてくるのではないか。
- 電化など炭素原単位の少ないエネルギーへのシフトを促す取組を推進する必要があるのではないか。
- 省エネをかなり進めてきた中で、これから先、さらに一定量を削減していくのは、相当なイノベーションや技術開発がないと進まないのではないか。経済がマイナスになってCO₂が減るといのは本末転倒である。
- 事業者行動計画書の中に、従業員の方への啓発活動、行動活動の促進に関する記述を加えてはどうか。企業として取り組んでいても、いったいどれだけ暮らしの中で実行できているか、疑問に思うところであり、一個人としてのCO₂削減の取組が進むような仕組みに計画書制度を改善していただきたい。
- しがCO₂ネットゼロを進めるには中小企業の取組が必要。省エネの知識を持った専門家を置けない中小企業に対する技術支援など、スピード感を持って省エネ技術を支援する必要がある。
- 中小企業の取組に対する負担軽減策としては、専門家の派遣による技術的な支援や中小企業向けに情報を提供する仕組みを検討してはどうか。
- 排出量の少ない企業ほどネットゼロへの取組が可能だと思っている。小さなネットゼロ企業を実際に作っていければ、そこから火が付き、ネットゼロを達成できる企業が増えていくのではないか。
- ネットゼロの世界を目指す場合には産業構造も変わり、コストもかかるが、それを投資として考え、企業が継続的に発展していくという観点から議論を進めていく必要があるのではないか。滋賀県の2050年の姿を、ネットゼロを通じてどう変えていくか、滋賀県がしっかりと考えていくことが重要。
- 今後ネットゼロを進めるにあたり、イノベーションが不可欠。技術を有する産業を育成するだけでなく、技術そのものを育てていく、技術開発を促していくことが必要であり、この条例に位置付けることで、企業の貢献にもつながっていくのではないか。
- 検討している新たな義務規定については、計画策定および報告という形式的な義務となっており、事業者側、行政側にとって手間や労力が増えるだけで、ネットゼロの実現にどれだけ効果があるか疑問である。

これまでにいただいたご意見等③

<日常生活>

- 今、感染リスクを考えて、生活スタイルを変えている人も多いが、その変化が、低炭素、SDGs、プラスチックごみ問題など他のことにも関連していると理解いただくことで、相乗効果が起こると思う。県の啓発活動において、関連する課題を組み合わせるべきだと思ふ。
- 省エネ家電の普及促進において、省エネというよりかは低価格的な商品が好まれており、購入時に省エネ家電の認識を広める活動はまだまだあるのではないかと。消費者の方に省エネの意識をもってもらえるような、低炭素の取組の必要性を理解いただけるような活動は必要ではないか。
- 県民の方々が何をしたら良いのかということ、ある意味定性的な部分や、感情に響くような部分をもっとアピールをしていかないと、結果的に、アクションに結びついていかないのではないかと。
- 家庭部門については啓発と併せて、住宅の断熱化や次世代自動車の購入等、コストが上昇する部分をどうしていくか考えるべきではないか。

<まちづくり(建物・交通・運輸)>

- 次世代自動車の普及は、現状では価格の問題があつて難しいと感じている。後押しする施策が必要ではないか。
- 自動車は電気自動車の普及を想定しているようだが、交通システムをいかに車に依存しない形態にかえていくのかを考えるべきではないか。
- 断熱効果は材料、ハウスメーカーや建売業者の高気密、高断熱という工法によって全く異なり、取組も変わる。庇をだして直射日光を防ぐという工法や、高層住宅等では、窓の有無で換気扇の稼働率がどうなるのかということも考えていく必要があるのではないかと。
- 建築物に対する新たな制度を設ける場合、建築時のコスト増、運用時のコスト増等への対応が必要ではないか。また、建築物省エネ法と重複する部分について調整が必要ではないか。
- 建築物の省エネ検討結果等について報告義務を課すことが想定されているが、導入を見送るなどする項目の主な理由はコスト面によるものと考えられ、そうした検討結果の全てについて報告を受けることの政策的な意味や効果はあまりないと考えられることから、努力義務規定とすることが適当ではないか。

これまでにいただいたご意見等④

<再エネ・次世代エネ>

- 太陽光発電はFIT制度もあり、投資として再生可能エネルギーを普及させていくというのは一定の役割があったと思うが、今後は自家消費を推進していく必要があるのではないか。
- 排出係数の低い電力会社の選択とあるが、排出係数のことは十分認識されていない場合もあるので、配慮して啓発をしてほしい。
- 「化石燃料から電力など炭素原単位の少ないエネルギーへの大幅な転換」を行っていく必要がある。一方、気温の低下に伴う需給逼迫の問題もあり、再エネ導入主導の転換はリスクを伴う。
- 再エネ導入義務化に関し、主な手法と推察される太陽光パネルの設置により光害や景観上の支障を生ずるおそれがあると考えられることから、適用除外の規定を設けるなど、地域への配慮が必要ではないか。

<ネットゼロ社会を支える環境整備・ムーブメント>

- 環境問題がこれだけ深刻な非常事態になっていることに気づいていないことが一番大きな問題。幼少時代からの環境教育が大切であり、滋賀県での日常生活が、日本、世界へとつながっていて、温暖化、環境破壊が自分たちに関わる大変な状況であることを実感してもらい、一人ひとりが意識をもって地球にやさしい行動が選べる環境にもっていくことが必要。
- 気候変動問題に取り組んでいく人材の育成、および将来世代である子供たちへの環境教育が重要。
- 取組を全体として高めていくことが必要であり、環境学習の推進を強化した条例として検討していくのは、方向性としてあるのではないか。
- 一番考えないといけないことは、2050年に実質ゼロを目指すという宣言を知事がされたことを、100%の県民に知ってもらうことである。
- 今後は、グリーン投資を促す、ファイナンスの面での支援が必要となってくるのではないか。
- 取組を進めるためには資金が必要で、補助金も取組の開始時には必要だと思うが、補助金は一時的なものなので、行動変容、環境教育を並行して行い、継続した活動へとつなげていけるような仕組みが必要。

これまでにいただいたご意見等⑤

<その他>

- 生活に直結している市町の取組を評価することで、市町との連携も進んでいくのではないかと。
- 現時点の技術だけでは、CO₂ネットゼロの達成は難しいとされているが、技術革新をしなくても現時点でできることはたくさんあると思う。システムを変えるということだと思う。
- 条例にはすでに県の率先行動の規定があるが、県として「ネットゼロ」を目指すのであれば、県の率先行動の規定は章に独立させてもよいのではないかと。
- 炭素税については、中小企業からすれば商品価格の上乗せになる。排出の抑制策として国は検討を進めると思うが、中小企業にとっては設備投資や資金確保は難しい。県には、中小零細企業が導入しやすいシステム、納得できる方向性を作るように国に要望いただきたい。
- 炭素税については、ドイツでは雇用保険の負担軽減をあわせて実施することで、企業の負担を減らしたという事例もある。お金の流れをかえることも必要ではないかと。
- CO₂ネットゼロの取組は、その取組を通じて、産業やまちづくりを変えていくことだと認識している。来年度の計画改定においては、部門ごとの到達目標を置くべきではないかと。
- 脱炭素に向けて滋賀県が、RE100のムーブメントを起こし、地域の再エネ化を同時に進めることで、その目標を達成されたい。